

## あとがき

この本に収めた五篇の共同討議の原稿が出来上がったころ、編集代表の田代慶一郎先生から、本書成立の経緯を「あとがき」として書くように仰せつかった。この本が生まれるそもその契機となった「ルービン研究会」が始まったときから、今回のこの出版に至るまで、偶然が重なって私が終始そこに関わっていたことをお考えになった上のことだろう。研究会の開催時、私はまだ大学院に籍を置く学生で、日文研の共同利用研究員として、稲賀繁美先生にご指導いただいている身の上であった。そのご縁でこの研究会にもオプザーバーとして参加させていただいたので、実は正規のメンバーではない。私のような立場の者が「あとがき」を書くことなど異例であるけれども、ご厚意に甘えさせていただいて、ここまでの経緯を簡単に記しておきたい。

「ルービン研究会」—— 私たちがそう呼び慣わしていたのは、平成十二年度に国際日本文化研究センターの客員研究員として来日されていたハーバード大学教授のジェイ・ルービン先生が、計画立案された共同研究「生きている劇としての能——謡曲の多角的研究」のことである。

この共同研究には、いわゆる能研究の専門家が内外からお出でになることになっていたし、それにシテ方や囃子方のような能の実技者の参加も当初から予定されていた。そしてさらに、能に特別の関心と興味をよせていても、特に専門的知識があるわけではないいわば能に関しては専門家以外の愛好家がこれに加わった。こうして広い視野を持つ観客と演者と研究者とが一堂に会して「生きている劇としての能」を論じることになったら、能の見方に新しい地平が拓けてくるのではないか、というのがルービン先生のねらいだったようである。

ルービン研究会の参加者・全日程等の詳細は別記のとおりであるが、研究会の進め方も普通のいわゆる

研究会とは違っていた。予め決められている謡曲について参加者全員が共同討議をするというかたちで議論が進行するのである。そのために参加者全員にはあらかじめ自分の意見をレポートの形で提出しておくという宿題が課せられ、参加者は事前に他の参加者たちのレポートを読んでおく義務があった。

ルービン教授滞在の一年間のうちに研究会は五回行われたが、いずれも一泊二日の日程で予定が組まれ、一日二曲ずつ、結局一度の研究会において四曲の共同討議が行われるというペースで進められた。研究会が二日にわたっていたので、初日の夜は参会者一同が会食をする慣わしになっていて、酒席に移っても研究会の議論がそのまま続くこともよくあった。《定家》の時など、禅竹をめぐる議論がより自由に沸騰し、「討議の時よりも禅竹の株は随分上がつたな」というのが皆さんの御感想であった。(田代先生などは「あのときは研究会よりもあとの宴会の方がよっぽど面白かった。録音しておけばよかった。」しきりに残念がられている。)

研究会における討議は、(一部手違いによる失敗はあったが)すべて録音されていたので、これを生かして研究成果をあとに残したいとお考えになったルービン教授は、ご自分の研究費を費やして業者にテープ起こしを依頼なさった。このテープ起こし原稿は、その都度参加者に送られて発言者にチェックをお願いしたのだが、その事務的な連絡係をたまたまその頃足繁く日文研に通っていた私が務めることになった。

こうして文章の形をとった研究会の結果を今度は何とか公刊したいとお考えになったルービン先生は、研究会幹事であった稲賀先生とご相談になり、田代慶一郎先生と西野春雄先生にその編集方を依頼された。一つの曲について二時間にわたった共同討議の議事録は膨大な分量になっており、また参加者以外には意味の通じにくいところも少なからずあるので、公刊するためには、これを整理編集して体裁を整える作業がどうしても必要だった。そのために田代先生、西野先生のお二方と、前からの行きがかり上お手伝いを続けることになった私の三人が、初めの頃は京都桂坂の日文研に集まって編集の仕事を続けていたのだが、そのうち田代先生が膝の具合を悪くされ京都までの遠出がご無理になり、西野先生も相次ぐ海外出張で留守が多くなるという事情が重なって、結局、田代先生と私で電話で編集作業を進め、その結果を西野先生にお送りして御覧いただく

いう形に落ち着いた。

一方、出版に関しては、西野先生の御尽力で、一時出版が決まりかけたことがあった。そのとき出版社に提示する見本として、急ぎ纏めたのが《高砂》であった。(本書に収録した《高砂》だけが他の討議よりかなり短いのは、この時の出版社の意向に従ってスモールサイズに仕上げたことが影響している。)ところが、期待していたこの出版話が、ある事情で結局は頓挫してしまった。しかし、田代先生との電話による編集という風変わりな作業もようやく軌道に乗ったところであったので、出版の見通しはなくなつたけれど、とにかく編集の仕事は続けようということになった。何よりも、膨大でとりとめのない討論の速記録が少しずつ整備され、まとまったかたちに体裁を整えてゆくのが楽しみになっていたのである。

こうして昨年から冬にかけて《定家》の長談義の編集を終えて、やれやれと息をついていたころ、稻賀先生から明るいニュースが届いた。せっかく編集作業が進んでいることだし、商業出版が駄目なら「日文研叢書」として刊行を申請してみようとお知らせであった。これが励みになって編集作業に弾みがつき、次の《弱法師》を早々に終えた。さて残りの二曲は何にしたものかと迷つたのだが、結局は編集のしやすそうな曲ということ《三井寺》と《鞍馬天狗》に決定、夏の終る頃には全五篇の編集作業が終了し、西野先生にお目通しいただき御了解を得た上で、締め切りの九月末日に原稿を日文研にお渡しすることができた。

この間、一年近く続けた田代先生との電話での編集作業も今となってみるとなつかしい。文書はもっぱらメールの添付ファイルでやりとりをし、テレフォン・デーと称して毎週一回、それぞれ四、五時間ずつおしゃべりしながら、原稿をまとめてゆくのである。これだけの長丁場ともなるとさすがに双方ともに疲れ果ててしまうので、途中一回か二回コーヒーブレイクとして休憩を取って、再開する。お昼前から始めた作業が、終わってみたら夕方になっていたというようなくともよくあった。

こんなことを云うと、まるで私が編集に参画したかのように聞こえてしまうが、これは云うなれば、ベテラン板前のあざやかな包丁さばきを、皿洗いも満足に出来ない料理見習が、魔法でも見せつけられるような気持

ちでただただ感嘆しつつ眺めていた……というのが実情であって、「編集とはかくあるべきもの」というお手本を示していただいたようなわけであった。

謡曲の共同討議を五曲並べるのであれば、いわゆる五番立てにしたいというのは、私たちも当然考えたことだったが、技術的な手違いで修羅物の討議は録音に失敗したので残念ながらそれが出来なかった。研究会での討議には《忠度》《兼平》の二曲が入っていて、特に《兼平》の時には風変わりな議論も続出して大変面白かったように覚えているのだが、これは逃がした魚は大きいの譬えの通りなのであろう。

最後に。研究会開催時から現在に至るまで、ほんとうに長い時間を要しました。おひとりずつお名前をあげることはできませんが、その間お世話になった多くの方々に、あらためて深謝いたしたく存じます。

二〇〇五年 神無月 大山 範子

本書のために貴重な写真をご提供くださいました鍬仙会と吉越スタジオ、ならびに河村晴久氏と金の星渡辺写真場に謝意を表します。さらに、謡曲詞章五曲の掲載を許可くださった日本古典文学大系『謡曲集』上下の発行所岩波書店と掲載許可とともにご助言をくださいました校注者の横道萬里雄・表章両先生に御礼を申し上げます。